

## 宮城県美術館フォーラム

「リニューアルってなんだろう？ ～美術館の新しい一歩を考える～」記録

日時：平成 30 年 1 月 27 日（土） 10 時 15 分～12 時 35 分

会場：宮城県美術館講堂

（司会者）

本日はお寒い中ご来場いただき誠にありがとうございます。これより宮城県教育委員会主催の宮城県美術館フォーラム「リニューアルってなんだろう？ ～美術館の新しい一歩を考える～」を開会いたします。登壇者の皆様，ステージにお入りください。

申し遅れましたが，私，本日の司会を務めさせていただきます宮城県教育庁生涯学習課社会教育支援班長の吉田と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それでは，はじめに主催者を代表いたしまして，宮城県教育庁理事兼教育次長西村晃一より，ご挨拶申し上げます。

（西村理事兼教育次長）

宮城県美術館フォーラム「リニューアルってなんだろう？美術館の新しい一歩を考える」の開催にあたり，主催者を代表いたしまして，一言御挨拶を申し上げます。

皆様方におかれましては，御多用中にもかかわらず，本フォーラムに御参加を賜り，心より御礼申し上げます。また，日頃より宮城県の教育行政，とりわけ生涯学習，文化芸術活動につきまして御理解と御協力をいただき感謝いたします。

さて，宮城県美術館は昭和 56 年 11 月に開館し，地域に根ざした，特色ある近代的な美術館として，「観る」「作る」「憩う」を基本理念としながら，活動を続けてきたところであり，これまでの来館者数は 850 万人を超えるなど，県内外の皆様にご親しまれております。

平成 23 年 3 月の東日本大震災時には，施設に被害はございましたが，同年 5 月 1 日からは佐藤忠良記念館を観覧料無料で開館し，7 月 5 日からは本館，県民ギャラリーを再開いたしました。「美術館が開いている」という日常を早い時期に取り戻せたことは被災者の心の支えとなり，美術館としての一つの役割を果たしたものと思っております。

このように今日まで歴史を刻んできた美術館ですが，開館から 37 年目を迎え，施設・設備の劣化・老朽化に加えてバリアフリー化，省エネ対策のほか，建設当時には無かった県民ニーズや環境の変化に対応していく必要が出てまいりました。

これらの課題を解決するために，県教育委員会では，平成 29 年 3 月に「宮城県美術館リニューアル基本構想」を策定し，さらに，基本構想を具体化するために，今年度中に「宮城県美術館リニューアル基本方針」を策定することとしております。

本日は，基本方針の中間案を皆様にお示しし，宮城県美術館のリニューアルについて県

民の皆様幅広く知っていただくとともに、皆様からの美術館リニューアルに対する御意見を頂戴したいと考え、今回のフォーラムを企画いたしました。

本日は、新潟市美術館館長塩田純一様、富山県美術館副館長杉野秀樹様からリニューアルの先行事例としてのお話を伺うこととしております。後半では、利用者の立場で基本方針策定検討会議委員である濱田淑子様、長年、小学校の図画工作をけん引されてこられました、東北生活文化大学短期大学部准教授、横山美喜子様を交えてパネルディスカッションを行います。御来場の皆様からも多くの御意見を頂戴できればと思っております。このフォーラムを機会に美術館がリニューアルする意義を皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

なお、宮城県美術館では、本日より「岸田劉生と椿貞雄展」を開催しております。前回の特別展「フィンランド・デザイン展」におきましては、多くの方々に御鑑賞いただきました。今回の展覧会につきましても多くの方々に御鑑賞いただけることを期待しているところでございます。

結びになりますが、御来場いただきました皆様のますますの御健勝と御多幸を御祈念申し上げます。私からの開会にあたっての挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

(司会者)

お待たせいたしました。これよりフォーラムの本編に入らせていただきます。

パネリスト及びコーディネーターの皆様をご紹介します。

お一人目は、新潟市美術館長 塩田純一様です。塩田様からは、美術館リニューアルの事例紹介とパネルディスカッションに御参加いただきます。

続きまして、富山県美術館副館長 杉野秀樹様です。杉野様にも事例紹介とパネルディスカッションにおいて、コーディネーターを務めていただきます。

続きまして、宮城県美術館リニューアル基本方針策定検討会議委員 濱田淑子様です。パネルディスカッションにご参加いただきます。

同じくパネリストの東北生活文化大学短期大学部准教授 横山美喜子様です。

最後にパネリストの宮城県美術館長有川幾夫です。

ご登壇の皆様のプロフィールにつきましては、プログラムの裏を御覧ください。

それでは、事例紹介に移らせていただきます。まず、新潟市美術館長の塩田純一様より、「新潟市美術館へようこそ」と題しまして事例紹介をいただきます。

それでは塩田様、どうぞよろしくお願いいたします。

(塩田氏)

皆様おはようございます。新潟市美術館長の塩田と申します。

私、もう40数年前になりますが、斜め向かいの川内のキャンパスで何年間かを過ごし

した。ですので、非常に懐かしい場所でもあります。本日はお招きいただきまして本当にありがとうございます。

新潟市美術館は1985年に開館しまして、2015年がちょうど開館30周年でございました。それで改修工事を行ったわけですが、改修工事がどのようなものであったのか、そして改修工事の後に美術館がどのように変わったのかということ、簡単にご紹介させていただければと思います。

これは「ようこそ、新潟市美術館へ。」という、新潟市美術館のPRのようなものでもあるのですが、もともとはリニューアルにあたって、一般市民向けのプレス発表を行う機会がありました。その時に使用したデータに少し新しい要素を加えて、今日ご紹介させていただきます。「新潟市美術館、新しいステージへ。」ということで、お話しさせていただきます。

これは1985年に開館した当時、改修前の美術館の外観です。実はこの新潟市美術館は、宮城県美術館を設計された前川國男さん、同じ建築家による設計となります。前川さんは1986年に亡くなりまして、85年というと本当に晩年の作品です。実は前川さんは新潟市のお生まれなんですね。そういうこともあって、幼い日を新潟で過ごしたということで、新潟への思い入れもあって、格別の思いもあったようです。

こちらと同様、色合いは少し違いますが、外壁が打ち込みタイルです。このあたりが正面入口なのですが、正面入口周辺の広場も打ち込みタイルで舗装されております。先ほどの写真はもう少し左手の方から眺めたものですが、こちらは入口付近から眺めたものです。

データを少しお話ししておきたいと思います。新潟市美術館は1985年10月の開館です。宮城県美術館が1981年だと思しますので、少し後になります。鉄筋コンクリート造2階建、延床面積は5,550㎡です。こちらの美術館に比べると遙かに規模は小さい。こちらの美術館は改修工事に伴って増床も予定されていると伺っているのですが、そのリニューアル後の面積と比べると、私どもの美術館は約3分の1でございます。

30年も経つと今の現代建築はいろいろなところに不具合が出てきます。機械関係とかでどうしても交換しなくてはならないところが出てくるわけですが、大規模改修ということで2014年の8月から翌年の3月まで工事を行いました。しばらく間を見て、リニューアルオープンは2015年の7月でございます。

これが改修後の様子です。あまり変わっていないように思われるかもしれませんが、実は「新潟市美術館」という館名があります。これが実は新しいんですね。今までは門があって、その左手にコンクリートの縦長の部分がありますが、その上の方に「新潟市美術館」というのが入っているんですね。それからもうちょっと左手になりますが、ちょっと斜めになった白いブロック状のものがありますが、これに「定礎 新潟市美術館」と入っているのですが、はっきりとした館名の表示はありませんでした。知っている人は知っているのですが、知らない人が来てもここがどういう施設なのかまずわからない、ということがありました。それでこういう館名表示を出しました。

美術館のリニューアルをして、さらに魅力的な美術館になるために、いろいろな事を考えました。これは西大畑公園という、美術館の向かいに公園があります。実はこの公園も前川國男さんの設計になります。今日はお手元に、前川國男さんと新潟、新潟市美術館についてのパンフレットを配らせていただきました。そちらも御覧いただければと思います。

新潟にはかつては堀割があちこちにあったそうなんです。今ではまったくなくなってしまいましたが。1964年に新潟地震が起きましたけど、その少し前に全部埋め立ててしまうんです。前川さんはふるさとに生まれて6歳ぐらいまで新潟で過ごすのですが、新潟の幼少期の記憶、堀割の記憶を、この公園に込めました。堀割の近くには柳が植わっていたのですが、左手にある高い木は柳です。公園の道路を隔てて向かい側が新潟市美術館になります。公園と美術館を一体化した形で設計をされています。こういうこともあまり知られていなくて、そういう前川さんの思いや、建築がどういう考え方で設計されたのかということなどを、ぜひリニューアルを機会に市民の皆さんに知ってもらいたいということもあって、お手元のパンフレットを作成した次第です。

改修工事にどのようなポイントがあったかということで、3つほど挙げさせていただきます。まず、「作品にやさしい美術館」というものです。美術館というのは貴重な文化財、唯一無二の作品を展示する場所です。安全に、良好な環境条件で作品を展示するという事がものすごく重要なのですが、そのことを改修工事にあたってはまず第一に優先するという事を考えました。

少し新潟市美術館に固有のお話をさせていただきますと、あまり名誉な話ではないのですが、10年ほど前に、ある展覧会の時に、生の土を使った作品を展示して、それが会期中にカビを生やしてしまったということがありました。美術館にとってあってはならないことなのですが、そういうことが起こって、美術館に対する市民の批判があったことがあります。そういう事をもう二度と起こさないと、それは美術館にとって当然のことですが、そういう意味も含めて「作品にやさしい美術館」と謳いました。

そこで具体的にどういうことが考えられるかというと、空調機は10年ほど前に入れ替えているのですが、その部分的な補修。それから電気設備の改修。屋上の雨水の改修。給排水設備の改修。これら機械関係の改修がほとんどを占めました。ハロン消火設備も、耐用年数がくれば当然取り替えなくてはならない。それから収蔵庫前にもちょっとしたスペースがあったんですが、従来は空調が入っていなかったところに、空調を導入。それから常設展示室の照明をLED化。これも省エネという観点から、改修工事となるとやっぱり考えなくてはならない。こういうハード面について前に進めさせると。

ただし、これはなかなか外から見えないわけですね。「美術館が変わった」と言っても、どこが変わったんだと。美術館としては生命線の部分であるので、これは大切であると。そして経費は改修工事の相当部分、8割くらいはこちらにかかったと思います。ですが、市民の皆さんからすると、やっぱり「どこが変わったのか、ちっとも変わってないじゃないか」ということになる。躯体もいじりませんし、増床工事があるわけでもありません。面

積が広がるわけでもありませんし、新たな機能が加わるわけでもないのです。じゃあ、どこがどういう風変わったということを印象づけたら良いのかということを考えてみました。

展示室のことをお話しします。企画展示室はこんな感じです。そこでリニューアル後どんな展覧会が行われたかという、これは舟越桂さんという、日本を代表する彫刻家です。2016年にここで展覧会を開催しました。ついこのあいだ、先ほどのガラスケースを使って、東京国立近代美術館工芸館の名品展、工芸の展覧会ですね。「人為と天然」という展覧会を開催しています。

それから常設展示室。先ほどご紹介した通り、照明のLED化が行われていますが、これはリニューアル直後の「Hi, Stories!」という展覧会です。「Histories」とも読めます。新潟市美術館の30年の歴史を振り返るといふ展覧会で、この部分は、左手の方が前川國男さんの新潟市美術館の模型であったり図面であったり、それから奥の方は、これからお話ししますが、服部一成さんというグラフィックデザイナーの作品を展示したコーナーです。服部さんは新潟市美術館のロゴ、シンボルマークを作っていただいている方です。

それでは今回のリニューアルで特に重視したデザインについてお話しします。服部一成さんは1964年生まれなので、まだ50歳ちょっとくらいですね。キューピーマヨネーズの広告とか、『流行通信』という雑誌などのデザインをやっていた方です。私どもの美術館にはロゴ・シンボルマークがなくて、やっぱりそれが必要だよ、ということで、2012年に公募で募集しました。それでこの方が第一位となりました。お手元のパンフレットの上にあるのがロゴとシンボルマークです。この服部さんに、美術館のサイン計画、美術館の内外にあるいろんな機能、室名の表示を一括でやってもらおうということを考えてみました。

これは、新潟の「N」を表した黄緑色のシンボルマークを、立体にして美術館の前に置いてみようじゃないかというものです。

対比して見ていきたいのですが、これは改修前のエントランスホールです。左手の方に受付カウンターがあります。入ってくると右手の方にロビー、たくさん椅子が置いてあります。もうちょっと進んでいくと展示室があります。例えばこの受付の位置などは、入っていきなりここにあると、どうも感じ悪いよ、閑所みたいで、管理されているみたいで嫌な感じがするという、来館者の声などがありました。

これは旧受付カウンターです。ここは現在は使っていないですね。後ろの壁には企画展のポスターなどを掲示しています。

ちょっと奥まったところに、左手の焦げ茶色のカウンターです、ここにカウンターをもってきました。入っていきなりこう、「あなたどこ行くんですか?」という感じじゃなくて、少し奥まったところに配置をします。そして、ごちゃごちゃした感じがあったのが、リニューアルの後にはだいぶ整理されてきています。

そして、カウンターの脇に前川國男の顕彰コーナー、オマージュと言いますか、前川國男がどんな人だったのか、どういう経歴でどういう建物を設計しているのかというのを、この3枚のパネルでわかりやすく表示しています。これも服部さんのデザインです。

それから、こういうピクトグラムです。ロッカーとか、トイレとかをこういうかわいい、おしゃれな感じのものにしました。

それから、これが一番わかりやすいと思うのですが、新しいサインです。白いフレームの中に、明快な読みやすいフォントで「市民ギャラリー」「Citizen's Gallery」、日本語と英語で表記がされています。

それから外のスペースです。屋外の彫刻の庭園、「海の庭」と呼んでおります。この考え方ですが、前川國男に対するリスペクトが当然あって、服部さんというデザイナーも十分認識している。それで、ただそこに新しいサインをいきなりもってくるのではなくて、一つ別の層を従来の壁の上に設定する。新しいデザインはフレームの中に収まるという形になって、それほど従来の前川建築とけんかするということはない。しかし白くて清潔感もありますし、非常に新しい印象、明るい印象をそれで出すことができたと思います。

これもそうですね。屋外のスペースです。

もうひとつ考えた改修工事のポイントは、「もっとくつろげる美術館に」ということです。美術館というのは、当然展覧会やコレクション展示がしてあって、美術を鑑賞する場ではありますけど、それだけではなくて、もっといろんな楽しみ方があっていいということです。いろんなくつろげるスペースとして、ラウンジ的なものを設定したり、インテリアを更新したり、Wi-Fiが使えるスペースを作ったり、そういう新しい試みです。

お手元のパンフレットを開いていただくと、下の方に「美術館のめざすもの」ということで、5つの項目を挙げております。そのうちの2つとして「生きている美術館」「つながる美術館」ということを言っておりますが、それがここに関係してくるかと思います。

例えばこういうスペース。外光が入ってくる、オープンなスペースがあります。美術館というと鑑賞する、勉強するということがどうしても思い浮かぶと思いますが、もっと気楽に遊ぶということもあっていいのではないかと思います。

従来、実はここはこういう図書室だったんですね。ガラス面で覆われていて、通常は鍵がかかっていました。それで、「図書を見たい人は、事務室に申し出てください」という運用になっていた。申し出ただけしたら、鍵を開けます。そこで見てください、と。でも、わざわざそういう形で言ってくる人はいないんですね。どうもそういう管理的な雰囲気があつてですね、ちょっとこれは問題ではないかと私は思っておりました。

それともう一つ、2階に講堂があります。こちらの講堂ほど大きくはないんですが、100人程度を収容できるスペースです。その隣に、お客さんがいらっしゃる時に休んでいたたり、待っていたりする、ソファを置いた空間があつたんですけど、何か今日のような講演会があつたりすると使うんですけど、通常はほとんど誰も来ないんですね。

これももったいないね、ということで、先ほどの図書コーナーをこちらにもつてくることにしました。もう全部開架式です。鍵を開けて、扉を開けて入っていくということではなくて、すぐに簡単に手にとって読んでいただける。画集を手にとったりですね。ただし、人件費の関係からここに係員を置くということはちょっとできません。ですから盗難の心

配なんかもあったのですが、それはいいよと。市民を信頼しようということで、こういう方法でやったんですね。そうしたら、今のところ、リニューアル以来 2 年半くらい経っていますけれども、まったく事故は起きておりません。

そして一方で、旧図書室は「ラウンジN」という人々が集えるスペースにしました。オープンにして外光が入る所。ここで簡単に参加できるいろんなプログラムをやってみましょうということなんです。「ぼくのわたしのびじゅつかん」ということでやっております。

例えばどんなことをやっているかという、これは現代美術の展覧会で「アナタにツナガル」展というのをやりました。それで、その時に「つながる」ということで輪っかを作って繋げていくという、本当に簡単に参加できるものです。小さいお子さん連れのお母さんも来て、そこで時間を過ごしていく。ここでは飲食もできます。

それから、昨年の夏に北大路魯山人の展覧会をやりました。ここで作業をしているのはボランティアの皆さんです。こういう棚を模造紙に書いて貼り付けて、魯山人の器を紙で作って、そこに魯山人の模様を描き込んだり、もっと自由にいろんな事を描き込んでくださいという、参加型のプログラムを開催しました。

それから、どこが変わったかということで、ここはかつての講堂のスペースです。ここも、非常に重厚で落ち着いているんですが、もっと軽快さ、明るいとこがほしいなというのが私の印象でした。

これはこちらの美術館にもお世話になりました、洲之内徹展の講演会を開催したときの様子です。まあちょっと、重苦しい感じがしなくもない。

これをですね、こんな風に変えました。もっとずっと明るい、壁の色味とか、それから天井もずっと明るくなりました。椅子もブルーだったり、オレンジだったり、以前よりずっと明るい色の椅子なんです。色を効果的に使うというのが、今回大きなポイントになりました。

それから、新しくなった講堂で、「美術館のあしたのあした」というトークイベントを行いました。新潟市の美術館は新潟市美術館以外に新津美術館というのがあります。それから県立でも、長岡に近代美術館、新潟市内に万代島美術館というのがあるんですけども、その4つの美術館の若い学芸員たち、みんな女性ですけど、集まってですね、「私たちはいつもどんな風な仕事をしているのか」ということを市民に話すという機会を設けました。

それからこれは、常設展示室と企画展示室の区画にあるロビーです。椅子にご注目いただきたいのですが、以前はアイボリー一色だけのソファでした。これを張り替えて、コバルトグリーンだったり、あとは黄色だったり、いろんな色の椅子を使うことにしました。そのことで、非常に雰囲気も明るくなりました。ここでコンサートをやったりしています。

それから、ミュージアムショップですね。ミュージアムショップのスペースが実はなかったんですね。そして、冒頭御覧いただきましたが、エントランスに入ってすぐのスペースは、従来こんな風になっていましたが、この奥の部分ですね。こういう形でショップにしました。

これは新潟市内の若い人がですね、街おこしも含めて。中心街がどうも寂れてきてですね、シャッター街的になっているんですね。そこに若い人たちが、空き店舗に入り込んでデザインショップをやっているんですが、相当意欲的な仕事をされていて、その方たちが、ショップの公募をしたんですけれど応募してくれて、それでこういう形の賑やかなショップを作ってくれて。

オリジナルのグッズもずいぶん積極的に作ってくれています。これは舟越桂さんの展覧会の時の、ノートだとか、しおりだとか、缶バッジ、それからハーブティーなんかも作ったりと、非常に活気が出てきた。

それからカフェもですね、「こかげカフェ」ということで、「L'ombrage(ロンブラージュ)」。木陰というフランス語です。ちょうどななかまどの木が前にあって、かつては「ななかまど」という名前の喫茶室があったんですね。そこを引き継ぐような形で、ここも若い人が入ってくれました。そして、こういう廃材を使っているんですね。ロンブラージュも割とくつろげるスペースです。

ここの売りがベーグルなんですね。米粉を使って、牛乳のバターは使っていません。つまり、今はアレルギーのお子さんがありますから、アレルギーの心配のない素材を使ってベーグルを作っています。そういう事に共鳴する若いお母さん方が、このカフェをずいぶん支持してくれていて、ランチ時なんかは別に中を見に来るというわけでもなく、このカフェにやってくる、というようなことが出てきています。

それから、これは最後のポイントですが、「誰もが快適な美術館」。これはユニバーサルデザインというものです。バリアフリー、障害がある方も、あるいはお年寄りの方も、無理なく過ごせるということで、段差を解消したり、そういうサービス。例えばトイレなどもすべて洋式化するとか、そういう事をポイントに置いて考えたわけです。

それから、もう一つ重要な事ですが、Facebook。今、美術館が情報をどのように発信しているかということとはとても重要ですが、2016年、リニューアルオープンの翌年から、Facebookも始めました。

こういった、限られた形でのリニューアルではありますが、その中で何ができるかということやってきました。「新しくなった」「いろいろと変わったな」という印象は、新潟市民のみなさんにお持ちいただいているかと思います。「AND MORE.....!」、「これからもっともっと・・・!」ということでしょうか。

宮城県美術館さんにはぜひ、素敵なりニューアルをしていただきたいと願っております。以上、新潟市美術館のリニューアルの事をお話しさせていただきましたありがとうございます。

(司会者)

塩田様、ありがとうございました。



続きまして、富山県美術館副館長 杉野秀樹様より、「にぎわいのある美術館作りへの挑戦」と題しまして事例紹介をいただきます。

それでは杉野様、どうぞよろしくお願ひいたします。

(杉野氏)

たいへん雪深い富山から参りました。久しぶりに朝起きて、太陽を見たら、やっぱり太平洋側というのは暖かくていいなと痛感いたしました。ただ、それを痛感しながらも、富山県美術館が新しく出発しまして、それが富山県民にとって太陽になればいいかな、と思っております。今日は短い時間ですが、新しい美術館がどういう性格の美術館であるかを皆さんに知っていただいて、新しい宮城県美術館の一助になれば、向かう方向性の一助になればなと思います。

「にぎわいのある美術館作りへの挑戦」という表題を掲げておりますが、富山県立近代美術館から富山県美術館に移転・新築する上で、大前提、大目標として掲げていたのが、この「にぎわいのある美術館」という言葉に集約できるのではないかと思います。画像をいっぱいもって参りましたので、とにかく見ていただきます。

富山県美術館というのはどういう所なのかということ、今流行りのドローンで空撮してありますので、それを見ていただきたいと思ひます。

富岩運河環水公園という名称の公園がありまして、元々は運河でした。その使われなくなった運河を、リニューアルして公園に仕立てた。その奥まったところに、今真正面に見えるのが、富山県美術館になります。前面ガラス張りの建物です。屋上に注目してください。ガラス張りで、美術館の中が見えるんですね。ミラーガラスではなくて、中が見えている。中がにぎわっている、そういう状況を公園側から見える美術館になっています。これは西側から見た風景。映像が南側になりましたが、屋上が公園になっているのがお分かりになるでしょう。そして先ほど言ひましたように、ガラス張りのファサード。これは東側に面してあり、中が良く見える美術館になっています。美術館の内と外が気持ち的に行き来できるような構造になっています。

それともう一つは、新しい美術館のプレス発表会を東京でしました。その時に作ったデモムービーです。

これが旧・近代美術館の閉館の様子です。ライトアップで最後を飾ろうということでイベントを行った様子です。そしてこれは建築家の内藤廣さん、知事。今見ていただひいるユニフォームはイッセーミヤケさんのデザインです。3月25日に一部開館。これは屋上の、子どもたちが遊んでいる様子です。屋上の開園風景。次に開館記念展の展示の状況です。

映像をざっと見ていただひいて、雰囲気をつかっていたいただひと思ひますが、次に画像で富山県美術館の特徴を見ていただきます。これが昨年12月に閉館した富山県立近代美術館です。1981年に開館しました。石張りに、ミラーガラスです。中が透過して見えるわけで

はない。それが新しい美術館では中がばっちり見えます。

さて富山県立近代美術館が目指したものは何だったのかを手短に言うと、20世紀美術のコレクション作り、それを常設で見せる。さらに20世紀美術の企画展をやる。近代美術館は、「美術作品を見ていただく」場としてスタートいたしました。

近代美術館の平面図を見ていただくと、展覧会のための美術館であることが良く分かります。ここが玄関ロビーです。ロビーを入れてすぐ企画展示室。2階に常設展示室がありますが、階段を上がってきて、ロビーがあって、すぐ常設展示室があるという構造です。極論すると、展覧会だけの美術館でした。富山県美術館の構想段階で、それにプラスアルファをどうしていくか。当然、貴重なコレクションを受け継ぎましたから、それを十分見ていただく場としての展覧会場も必要なのですが、それだけでは富山近美のコピーになってしまう。プラスアルファでどういう魅力を付与するか。それが大きな課題であるし、それがにぎわいづくりに繋がるということであったと思います。

時間がなく詳しくはお話しできませんが、2003年に大規模改修をいたしました。赤い印のところが変わったところになります。ブックショップでは絵はがきや図録しか売っていなかったのを、拡大しましてミュージアムショップを作りました。2階の管理部門。実はここに学芸室や館長室とかがあったのですが、全部展示室にしました。図書閲覧室、新潟さんの事例もあったように、部屋だったのをオープンスペースの図書コーナーに変えました。次に2階部分。ビデオブースがあったところをやはり展示室に変えました。

改修をして、何とか魅力をアップさせようと試みたのですが、やはり既存のハードの中でいろいろな部屋を配置したところで、なかなかうまくいかなかったというのが現実でした。動線に無理があり、わかりにくいとのご批判を受けました。必要と思われる機能を詰め込んでも、上手くいくものじゃないと痛感いたしました。

2003年のリニューアルは、当時の課題の解決を図ろうとしたのですが、ハードによる限界、それによる失敗に終わってしまった、苦い経験がございます。しかし、この失敗が、重要であったような気がします。ハードの限界があったので上手くいかなかったにしても、この時に出したいろいろなアイデアが、富山県美術館を作る上で非常に重要なキーワードになりました。

順番に言いますと、ブックショップからミュージアムショップ。魅力あるミュージアムショップを目指す。魅力ある作り方が重要。キッズコーナーの新設。これが現在、キッズルームに発展します。特色あるコレクションをもっておりますので、それを生かした部屋をリニューアルの時に設けようと思いました。動線でうまくいかなかったのですが、これらも今回の富山県美術館の建築におおいに生かされ、部屋として独立して作った経緯がございます。ですから、決して失敗がそのまま失敗で終わったわけではなくて、その失敗をステップにして、新しい富山県美術館に生かされたなと思っております。

富山近美の県内評価というのは決して芳しくありませんでした。県立の水墨美術館というのがありまして、そこは年2回ほどマスコミと経費を負担しあう実行委員会が主催する

企画展を開き、マスコミがガンガン宣伝をして観覧者数を稼ぐ。ですから富山近美を上回る観覧者数を誇っていました。ここを見ていただくと、富山近美はほぼ全敗、惨憺たる状況でした。県庁の中での評価、あるいはマスコミの評価、そういうものはどうしても数字でチェックされてしまいます。やっぱりにぎわいというのは非常に重要だなと。僕らはかなり厳しい環境の中で常に叩かれてきたし、それならどうしようと知恵を絞り、新しい美術館に生かそうという風になっていたと思います。

この画像は美術館側から見た東側になります。運河のある公園があって、その向こうに3,000メートル級を誇る北アルプスのパノラマが広がる。これが劔岳で、その右側が立山になります。ちょっと最近雪が降ったので、雪景色をお見せするのもいいかなと思って撮ったのですが、公園も雪で覆われている。雪景色もとても美しい光景です。これは春のうらかな季節の公園で、運河を利用した遊覧船がのんびりと走っていく。そして美術館が見える、という画像です。これは夜間照明をしている美術館になります。この巨大な美術館が夜になってすぐに照明を消してしまうと、この一帯が暗くなってしまいますので、夜の11時までライトアップしております。先ほど言いましたように、非常に内部が見えるので、外から照らすというよりも、内部のライトをそのままつけておく。そうするとライトアップになって、周辺が明るくなる。

新しい美術館の建築について平面図でご説明しますと、1階に玄関ロビーがあって受付、小さいギャラリーがあってカフェがある。そして、「おやつ」と思われるのはこの外階段。2Fの屋外広場につながる屋外の階段がこの建物の周りを一周しています。美術館の中に入らないでも屋上にアクセスできるという建築になっています。

2階は、近代美術館から受け継いだコレクション、あるいは企画展をする階になります。展示室1, 2, 3, 4がありまして、1はコレクション、3, 4は企画展。そして展示室2は、大型の企画展では2, 3, 4を使い、中規模の企画展で3, 4を使う場合、展示室2はコレクションを展示するという、フレキシブルな使い方にしました。

富山県美術館の特色が最も出ているのは、3階だろうと思います。3階に着くと、まず目に飛び込んでくるのがアトリエ、その右手にレストラン。キッズルームとその前の部屋が展示室5。これはデザインの展示室。展示室6は後で画像を見ていただきますが、瀧口修造の展示室ですね。そして図書コーナー、ホールがあります。

順番にサッと見ていきましょう。まずこれは屋上です。屋上は先ほど動画で見ていただいたように、いろいろな遊具があります。とはいえ、どこの公園にもあるような遊具を並べた屋上ではありません。デザイナーの佐藤卓さんにデザインしていただいたオリジナル遊具です。「ぐるぐる」。これは回転させる遊具です。きのこのようなものがありますが、きのこを支柱にしたハンモックがあります。寝転がってうとうとする。また、ぼこぼことした、何か変な形のものが並んでいます。遊具の名前はまさに「ぼこぼこ」。ソフトクリームのような、それこそウンチのような形をしたものがあります。これは「ぷりぷり」と言います。佐藤卓さんは、擬態語・擬音語、これをオノマトペと言いますが、オノマトペか

ら形を発想したオリジナル遊具を並べている。ここに子どもたちが集って、デザインあるいはアートになんとか遊びながら触れる、そういう屋上にしてあるわけですね。

これは夕暮れ時に、ちょっと格好いいなと思って撮ったのですが、子どもが、これは「ふわふわ」という遊具ですが、飛び跳ねている。日没近いです。このオノマトペの屋上は、日没で遊具を使うのは禁止。夜の10時まで、今度はライトアップします。屋上は、散策やデートの場になります。

これは屋上で結婚式を挙げられた時の画像です。美術館利用の裾野を広げるユニークベニューの取り組みですが、様々な美術館の利用の仕方を、今、試行錯誤しながら挑戦しているところです。

この画像は2階の屋外広場です。ここには外階段で上がっていくこともできますし、美術館に入ってからでも、屋外広場に行くことができます。この屋外広場は現代美術家、木彫作家の三沢厚彦さんの作品が設置されています。木彫を原型にブロンズに鋳造したものです。ここに並んでいる3点の熊の作品は、手前から高さ1メートル弱、次が3メートル、奥が2メートル。現代美術を前に皆さんが記念撮影をする。富山県美術館の記念写真の撮影スポット。美術館にいらっしやって何か記念として残していきたい、持ち帰りたい。その思いをかなえるためのスポットとして用意いたしました。ただ、以前とかなり違うなと思いますのは、おとなしく記念撮影をするのではないのです。熊の周りで踊ったり、ちょっと奇想天外なポーズをしたり、インスタ映えと言うのだと思いますけど、来館者がウケを狙って撮影を楽しんでいらっしやる光景をよく見ます。

これは3Fの展示室5、デザインの展示室になります。富山県美術館は現代ポスターを14,000点ほど所蔵しています。プロダクト・デザインの代表格として椅子も集めており、240点ほど持っています。デザインの所蔵作品をお見せする展示室です。椅子の積層展示なるべく多くの作品を見ていただくようにしています。これは観覧者が椅子で寛いでいらっしやる写真です。椅子もフロアに直に置いてあるものは体験していただける、座り心地を確かめることができるようになっています。

次に見ていただくのは展示室6の瀧口修造コレクション展示室です。瀧口修造は富山県出身の、シュルレアリスムを日本に紹介した詩人であり、美術評論家です。彼の書齋に集まってきたいろんなオブジェや美術作品、あるいはお土産品や玩具、石ころや貝殻など、種々雑多なもので構成されているのがこのコレクションです。瀧口の書齋の雰囲気を出すために、小さな棚を設けました。棚を設けるといっても整然と並んでいるとつまらないので、大きさもまちまちで、おもしろい棚ができたなと思っております。

これはアトリエです。2階から3階に上がると最初に目に入ります。オープンにしてある空間と、ガラスの扉で閉ざすことのできる奥の部屋に分かれております。手前のオープンスペースは可動壁で仕切ることができます。この可動壁は磁石がつくようになっていて、マグネットシートをいろいろな形に切って壁に貼りつけておいたのですが、大人も子供も好き好きに何か形を作る。与えられた形をうまく利用して、マンガのキャラクターなんか

をうまく作ります。最初はこんなものやっても、誰も喜ばないし使わないと思っていたのですが、開館以来ガンガンと使われるので、ボロボロになってしまっ。美術館に来る人達が作品を観るだけでなく、自分も何かを表現したい、何かを残していきたい、そういう気持ちをもって来館される方がとても多くなっているようです。

これは3階にあるホールです。ここでレクチャーや映画会をやります。しかしこうしたイベントは主に土曜・日曜です。イベントがない日は閉まっている、そういう空間はもったいないよね、という話になりました。椅子を取り払い、空間を作り、何かできるようにしよう。美術館がやっているときは、必ずホールも使われているようにしよう。そこで導入したのがこのアトラクションです。ここにカメラが内蔵されています。この辺に立つと、人を認識してキャラクターがスクリーンに出てきます。人が手を動かすと、動いた軌跡がリボンとしてスクリーン上に表示される。3Dドローイングと呼んでいますが、これはすなわち自分の動きが形になって表される。これは考えようによっては戦後アメリカのアクション・ペインティング、抽象表現主義ですよ。最初はお子さんは喜んで動き回ります。お子さんだけでなく、お年を召した方も健康にいいということで、どんどん使われますけれども、とにかく最初は皆さんもうめちやくちや動き回ります。でも動けば動くほど形がぐちゃぐちゃになりますね。で、ある瞬間に動きを制限し始める。「制限すると、自分のイメージしている形になるんだ」とわかる瞬間がある。そういう人たちは動きを自分でセーブしていく。セーブして、自分の動いた軌跡を像として残そう、自分のイメージしたものを残そうという動きに変わっていく、そういう瞬間があります。遊びながら学ぶ瞬間、それは見ていて非常に驚きました。

この写真は3階の図書コーナーからホールを眺めたものです。講演会、映画会をやるときはブラインドを下ろします。次に図書コーナーです。司書あるいは職員は配置しておりません。美術書を読んでくつろいでもらおう。イサム・ノグチさんのデザインした椅子を並べています。

これはキッズルームです。保育士や職員は配置しておりません。子どもたち、あるいは親子連れで来られて、自由勝手に遊びましょうという空間にしてあります。コルクの積み木があって、思い思いに造形して楽しむ。家庭ではできない、自分の身長よりはるかに大きいものを、こうして積み上げて作って楽しんでいる。美術館に来て子どもたちが遊べる空間の提供。日常とはちょっと違う要素を組み合わせることができる空間になったのではないかと思います。

この写真は3階の中央廊下に作ったポスターのタッチパネルです。先ほど現代ポスターを14,000点ほど所蔵しているとお話ししましたが、展示室に展示できる作品は数が知れています。物理的な制限がありますから、たかだか50点で、100点はなかなか飾れません。ですから、量を体感してもらえない。富山県美術館にはたくさんの現代ポスターがあることを知っていただくためのシステムです。ポスターのサムネイルが80インチ型のタッチパネル5枚に表示されている。これがゆっくりと右から左に流れていきます。「あ、これちよ

っと見てみたいな」というサムネイルを選んでタッチすると、大きく拡大され、作品のデータが表示されます。消すこともできます。5枚のタッチパネルで、5~600枚のポスターのサムネイルが並んでいます。ポスターの量を体感すると同時に、「選ぶ」ことで自分も能動的に加わっている思いになる、参加型のシステムです。

3月25日に一部開館し、8月26日に全面開館しました。一部開館と全面開館で何が違うかということ、全面開館の時に初めて美術展をスタートさせています。一部開館と全面開館の間に何をしたかということ、美術館の空気環境を調整する時期、空調の試運転と温湿度の安定を図る期間、建材、接着剤等から出るガスの排出を行いました。これは美術館の機能を万全にするための作業です。

その他に一部開館の意義は何があったかということ、各施設の試運転、皆さんに施設の中身を知っていただく期間になったと思います。展覧会と同時スタートさせなかった故に、幅広い世代の方々が来館して楽しられました。美術展で全面開館した場合、たぶん小さなお子さん連れのご家族の方が「やっぱり子どもがうるさくしたらちょっと迷惑なんじゃないか」と思われ、来館を控えられたのではないかと思います。それが、美術展をしていない一部開館ということで、そういう人たちがどっと入っていただいた。小さいお子さん連れのご家族が「あ、安心して使える美術館なんだ」「美術展を見なくても、おもしろい」と思っただけ、そういうことを実感していただいたような気がします。一部開館と全面開館をずらしたことによって、小さいお子さん連れのご家族が、「遊び」をキーワードに来られる美術館になりました。バギーのある光景がこの美術館にとって違和感のない、日常なんですね。全面開館した後も、そういったご家族連れがどっと来る、他ではあまり見受けられない美術館の姿になったなという気がします。

「富山県美術館とは何か」。富山近美時代から継続する展覧会活動に、参加型コンテンツをいっぱい盛り込んだ、展覧会プラス新しく付与したもの。それが富山県美術館だと思います。先ほど見ていただいた屋外広場、記念撮影スポットの提供。ポスターのタッチパネル、自分で好みのポスターを選ぶ。アトリエ、専門的な技術がなくても、気軽に「作る」を体験できる場。キッズルーム、親子で安全に遊ぶ。3Dドローイング、体を動かし表現する。オノマトペの屋上、遊びながらアートとデザインを体感する。言うなれば、個々人の表現欲求に応えるコンテンツを、盛りだくさんに詰め込んだ美術館。見るだけでなく、参加する、体感・体験する、そしてそれを持ち帰る、そういうことができる美術館が富山県美術館です。

オノマトペの屋上を監修された佐藤卓さんの言葉ですが、子どもにとって、大人にとっても言えるかもしれませんが、遊びながら、表現しながら、それが学ぶにつながるのではないか。要するに「遊ぶ」と「学ぶ」に境界線はない。楽しむことが学びにつながる、そういう美術館づくりを目指しました。

これは数字だけの話ですので、展覧会にも多くの方が見に来ていただいておりますが、入館者も、「これって本当にこんな数字なの？」と疑いたくなるような数字の方々に来てい

ただいております。富山県美術館は、近代美術館の財産を受け継ぎながら、受け継ぐだけではなく、もっと違うものを付与することによって、人の集う楽しい美術館、まさに「美術館のにぎわいづくり」を目指した美術館です。

もし皆様が北陸にいらっしゃるとき、当然金沢がお目当てなのかもしれませんが、ついでにちょっと手前に富山県美術館があるよね、と思い出してもらい、立ち寄っていただければありがたいです。ちょっと早口で話してしまいました。聞きづらいところがあったかもしれませんが、ご静聴どうもありがとうございます。

(司会者)

杉野様、ありがとうございました。

続きまして、本フォーラムの事務局でございます、宮城県教育庁生涯学習課長 新妻直樹より、宮城県美術館のリニューアルに係る基本方針の中間案についてご説明いたします。

(新妻生涯学習課長)

皆さんこんにちは。宮城県教育庁生涯学習課長の新妻と申します。ここでは、宮城県美術館が現在リニューアルを進めておりますが、「基本方針」の中間案についてご説明させていただきます。お手元に A3 のカラーの横の資料があると思います。そちらを御覧いただきたいと思います。スライドの方は、その概要版をさらに簡略化したものを映して説明していきたいと思います。

ここ宮城県美術館は、昭和 56 年の開館でございます。37 年目を迎えておりまして、二つの課題に直面していると考えております。一つは建物・設備の老朽化が進行していること、それから時代とともに顕在化してきました、今日的な課題への対応の二つでございます。今日的な課題には、例えば展覧会の規模に大型のものが増えていることや、美術表現のあり方が多様化してきたこと、美術館に期待される役割が変化してきたことなどが挙げられます。このあたりは先ほどの富山県美術館の発表と通じるものがあると思います。これらの課題に対応するため、「美術館リニューアル基本構想」を策定し、今年度はそれをさらに具体化すべく、「リニューアル基本方針」の策定に向けて検討を重ねております。

それでは、中間案についてご説明したいと思います。リニューアルにあたって、4 つのコンセプトを設定しております。それに沿って具体的な改修工事の内容を検討しています。それぞれ「子どもたちの豊かな体験を創出する美術館」「人々が憩い、くつろぎ、集い、つながる美術館」「国内外の人々が魅了される美術館」「ともに築きあう美術館」の 4 点です。またこれらを成り立たせる土台として、下にありますが、基本的機能、展示、収集、調査研究、教育普及、こちらも充実させていきたいと考えております。お手持ちの A3 の資料の下半分では、この 4 つのコンセプトに沿ってリニューアルの具体的な内容をお示ししております。

まず 1 番目です。「子どもたちの豊かな体験を創出する美術館」では、次代を担う子ども

たちが美術に触れる機会を確保し、美術を身近なものとして捉え、主体的に美術との関わりを深めることのできる場を目指します。

中心となる取組としては、まだ仮称ですが、「キッズ・プロジェクト」というものの推進を掲げております。これは、子どもに関連する取組を、リニューアルを機に再構築して、さらに充実させるものです。作品鑑賞や造形、素材体験といった、主に教育普及事業として行ってきたプログラムのほか、展示や研究、空間づくりなど、館全体に及ぶ取組とします。対象は子どもだけに限らず、子どもについて考えることで、新しい感覚との出会いを作り出す、誰もが過ごしやすい美術館を考えるなど、あらゆる人に結びつくものとして構想しております。

その拠点として、「キッズ・スタジオ」というものを設けることを検討しております。様々なプログラムの場となるほか、現在の造形遊戯室の機能を引き継ぐものと考えております。お示ししているのはイメージ図でございまして、具体的にどのような空間とするかは引き続き検討しているところでございます。

続きまして、(2)「人々が憩い、くつろぎ、集い、つながる美術館」では、どなたでも気軽に立ち寄り、ゆっくりとくつろぐことのできる空間、さまざまな人々が交流し、活発なコミュニケーションが生まれる空間づくりを目指しています。

中心となる施設として「交流ラウンジ」の設置を検討しております。ここでは、来館者が自由にくつろいで、にぎわいの拠点になるのと同時に、これも新潟・富山でもありましたが、従来の図書室の機能を引継ぎまして、情報機器等も設置して、美術に関する情報収集ができる場とすることを考えております。

また、あらゆる来館者が快適に過ごすことができるよう、館全体においてユニバーサルデザインに配慮した設計を徹底することを考えております。もうひとつ、「つなぐ」要素のひとつとして、県立の美術館として何ができるのかを問い直しまして、県内の公立美術館・私立美術館を結びつけるハブとして機能できるよう、連携体制を整備して、相互の情報発信等を行いたいと考えております。

(3)「国内外の人々が魅了される美術館」では、宮城県美術館でしか味わえない魅力を発信することで、県内はもとより、県外、国外からも来館していただくことを目指しています。美術館のオリジナルの魅力としては、まずコレクションということを考えまして、ここでは主に展示・収蔵機能の充実について記載しております。まずは作品の安全性を十分に確保し、作品の魅力を最大に引き出せるような、展示環境と収蔵環境を整備することが最優先の課題となります。

それに加えて、展示と収蔵の新しいスタイルとして構想しているのが、図で示しております、「ヴィジブル・ストレージ」です。これは「見える収蔵庫」を意味するもので、来館者が展示室をめぐる中で、作品の収蔵の様子を一部見るような展示方法、収蔵方法でございまして。国内の美術館ではあまり例の見られないものですが、作品の保存環境に十分な注意を払いながら、新鮮な鑑賞体験をできるよう、検討を深めたいと考えております。



また、展示室を拡充することで、常設展を質量共に充実させ、また大規模な特別展の開催にも対応できるようにと考えております。一方、スペースが不足しております収蔵庫も拡充し、安全な収蔵環境を確保すると共に、今後の収集による作品の増加にも備えます。海外からの来館者にも楽しんでいただけるよう、他言語表記の充実も図って参りたいと考えております。

(4)「ともに築きあう美術館」では、新たな時代環境に即した「開かれた美術館」として、美術館と芸術文化を来館者と共に築きあうことを目指します。

県民の創作活動の発表、交流、鑑賞の場となってきました県民ギャラリーですが、地下1階にあるという位置や、内部の仕様について、利用しづらいというご意見をいただいております。また県民ギャラリーの利用者が、館内の他の施設にも足を運びやすくなるような動線も考慮しまして、移設することを現在検討しております。

また今私たちがおります講堂ですが、こちらについても設備の老朽化が課題となっているため、移設を検討しています。現在の収容規模は維持した上で、平面的な空間として使用することや、分割して使用することが可能な構造を採り入れることも検討し、講演会やワークショップなどの多様な催事に、フレキシブルに利用できる施設としたいと考えております。他にも、創作室を含めて、県民の創作活動の促進に資する空間については、今後も充実した環境を整備したいと考えております。

リニューアルの具体的内容について、主なポイントをご紹介しました。詳しい内容につきましては、宮城県の生涯学習課のウェブサイトで、基本方針の中間案という冊子にアクセスできますので、よろしければ後ほど御覧いただければと思います。

最後に事業スケジュールについてでございます。昨年度、平成28年度に「基本構想」を策定しまして、今年度は「基本方針」を年度内に策定する予定にしております。今後は御覧のようなスケジュールを経て、現在のところ、36年度のリニューアルオープンを目指しております。本格的な設計を行うまでにはまだ時間がございますので、今後も幅広く県民の皆様から意見をいただきながら、新しい美術館をより良いものにするための努力をして参りたいと考えております。

以上で「基本方針」の中間案の説明でした。どうもありがとうございました。

(司会者)

それでは、パネルディスカッションの方に移らせていただきます。

ここからの進行は、コーディネーターの杉野様にバトンタッチいたします。杉野様、どうぞよろしくお願いいたします。

(杉野氏)

ちょっと前半、長引いてしまいまして、押し気味ではございますが、いくつかの課題がありますので、パネリストの方にご意見いただきます。とはいえ一つに意見を集約すると

か、結論を導き出すというものではございませんので。皆さんが共に宮城県美術館をより良いものにする、そのためにはこういうものも必要だねとか、何かヒントを提供する、そういう場になればと思っております。

それでは、いくつか課題をいただいているのですが、僕が一番大事だなと思っておりますのは、「人々が憩い、くつろぎ、集い、つながる美術館」。大事だとは思いますが、つかみどころがない。富山県の場合でも同じような言葉を打ち出したのですが、具体的なものは何なの、というのが見えてこない言葉ですね。でも今の美術館には必要だと思われる、「憩い、くつろぎ、集い、つながる」をキーワードにして何が発想できるのか、具体的にはどんなことを目指したらいいのか、ということのパネリストの皆様にご意見を聞きたいと思っております。

それでは、宮城県美術館のオープン当初から、美術館の応援団のような形で関わられてこられた濱田さんにとって、くつろぎとか、憩いとか、美術館に何を求められましたでしょうか。

(濱田氏)

私は宮城県美術館の利用者として、そしてファンとして、宮城県民として、策定委員をさせていただいているのですが、私がいちばん最初にリニューアルということを知ったのは、「イメージのリニューアル」ということでした。宮城県美術館って、皆さんイメージをどのようにおもちゃわかりませんが、私にとって現在は、とても格調が高い、とても静かで、ゆっくり鑑賞ができるという、そういう美術館でした。それを各世代を通じて楽しめる美術館にリニューアルできないかなと、美術館のイメージをリニューアルできないかなと思いました。その時に、「くつろげる空間」という案がありまして、今までそういう場所って、なかったかもしれないなと思いました。

例えばお弁当を持って美術館に来て、屋外ではなくて屋内でも、ちょっとお弁当を食べる場所がほしいなと思ったりしたこともありまして、いろんな世代の方と交流できる場所もあるといいなと思っておりました。子どもを連れてきても、いろんな世代の方の中で子どもが遊んでいるというのは、私の中ではとても望ましいイメージとしてありました。今私もシニア世代になって、本当にシニア世代って元気で活力もありますので、そのシニア世代の活力をこういう交流スペースで活かさないのかなというのを、今考えて大きな夢を膨らませております。この場所で、ボランティアも含めて、シニア世代の活力が活かせる場所になっていたら。なかなかこの頃は触れあう機会のなくなった子どもたちとも触れあう機会、いろんな世代の方とも触れあう機会が、こうしたスペースで実現できればいいなと考えました。具体的にどのようにというのは、これから。私欲ばりなのでいろんなことを会議でも申し上げてしまうのですが、そんなことです。

あとは、「安全な美術館」というのが私の姿勢の中にはあって、東日本大震災を経験しておりますので、ものにとってはもちろんですが、人にとっても安全な美術館を作ってもらえたらいいなというのが、一番思うところです。

(杉野氏)

今度はですね、その「集う」「憩い」に「子ども」というキーワードを交えて、横山さんの方から、これまでのご見識を踏まえながら、何か一言いただけますでしょうか。

(横山氏)

先ほどご説明いただいた中に、「キッズ・プロジェクト」というのがあったんですけれども、聞いていて3つポイントがあるかなと思いました。

1つは鑑賞なんですけど、やっぱり美術館というと鑑賞、鑑賞というと作品というふうなイメージがあるかと思うのですが、子どもたちにとって鑑賞というのは別に作品だけとは限らなくて、美術館の日常では見られないような建物を見たりだとか、そこにいろんなものがあるということに気がついたりすることも、鑑賞の一つの要素です。宮城県美術館は、例えば今までも美術館探検という形で子どもたちに提供していたと思うんですけれども、そこをさらに深めて行ってほしいなというのがあります。先ほど富山の話をついたときに、オノマトペの作品などもあったと思うんですけど、そういう風に五感で感じられる、触れるとか、音が聞こえるとか、そういういろんな作品もぜひ、子どもたちが自然に鑑賞できるような形であるといいなと思います。一方でこの美術館はたいへん自然が豊かなところなので、その自然を味わいながら、例えば木を見つけて、この木に何かプレゼントしようとか、そんなような作品を作るとか、そんな鑑賞もありなのかなと思いました。

2つ目は表現なんですけども、表現のところでは造形と、素材体験ということばが書いてあるのですが、造形が「作る」ことだとすると、素材体験というのは「造形遊び」だと思うんですね。遊びという話が先ほど出てきましたが、美術館ならではの作る活動、なかなか学校ではできないようなことや、いろんな素材体験をさせてもらえるようなことも、ぜひいつもプログラムに加えてほしいなと思っています。

それと最後に運用のところでは、学校や各種団体の来館に対応できるものということで、今までは学校から大人数で来ても、それこそお弁当を雨の時に食べられるような場所がなかったりしていました。もちろん、家庭で親が子どもを美術館に連れてくるというのが、大変いいことだと思うのですが、やっぱりなかなか連れてこられない家庭もありますし、そこは学校教育としては、ぜひ子どもたちを学校として連れてきて鑑賞させたい、体験させたいというのがありますので、そういうことに対応してもらえるのは、大変ありがたいなと思っています。また施設の話とずれてしまうかもしれませんが、例えば月曜日や閉館の時にちょっと学校に対応してもらおうとか、そういうことがあると嬉しいと思っています。

鑑賞と表現は常に一体化しているので、先ほど大人の人たちもみんな表現したくなるようになってきたというお話がありましたが、子どもたちの鑑賞と表現のスイッチはすごく直接的なので、何か見たらすぐに作りたくなる、作ったらまた見たくなるというのを行

き来していますから、ぜひ鑑賞と表現の両方ができる場を充実させてほしいというところが、一番大きなところでございます。

(杉野氏)

ありがとうございます。では、主役たる宮城県美術館の館長である有川さん、この美術館がリニューアルの柱として立てていらっしゃる、「安らぎ」であるとか「くつろぎ」、「集う」、これらがリニューアルによって達成されると思いますが、何かすでにイメージされているものはあるのでしょうか。

(有川館長)

ここに文章で書いていることを逐一ご説明すると、時間がかかる割にはなかなか理解しにくいということになるかもしれません。少し単純化して申し上げますと、まず今の美術館は、何か目的があって来るところです。展覧会を見ることは大きな目的の一つですが、それに限らず、「ここに何となくいい」と言う大変ですけども、例えば「レストランで食事をする」という滞在の仕方がありますが、そういうことではなくとも、美術館でのんびりしている時間があってもいいのかなと。あるいはそういう場所であっていいのかなということで、ラウンジというものを考えたのですが、そこにさらに図書や映像によって、情報の提供ができれば、美術館としてまたそこでメッセージを伝えることができるのではないかなと思います。

それから、「集う」「憩う」といったことの中で、もうひとつは、逆に美術館というのはですね、ある意味では普通の事務所の建物なんかとは違う、個別の空間というか、異空間といえますか、そういう面もあると思うのですが、特別な場所としての体験の場でもあり、それが心の豊かさに繋がってゆけばいいのではないかなと。とりわけ、先ほど富山の三沢厚彦さんの熊の彫刻なんかがありました。美術館の中にああいった彫刻を置いて、美術館自体を特別の場所にしていく、あるいは心に何か刺激や豊かさを与えるという、ああいったものを設置するプロセスというか、そういう目的とかですね...僕も行ったんですけど、みんなそこで写真を撮っていますね。ちゃんと順番を待っていたり。

(杉野氏)

それこそくつろいでいるんです、写真を撮りながら。

(有川館長)

そうですね。なので、例えば美術館にそういう所蔵品を置くのではなくて、美術館を建てる時に、建物だけではなくて、アートワーク作品と一緒にやるというプロセス、あるいは考え方について、逆に教えていただけますでしょうか。

(杉野氏)

とにかくにぎわい作りというのを、大きな目標にしました。にぎわいを作る上で、うちの美術館では非常に重要だったのは、あるものを打破しなければいけない。それが何かというと、富山の近代美術館が収集していた 20 世紀美術は、一般の方々にとって難解であるとか、理解しにくいとか、見ても分からないといった印象だったんですね。その印象がある限り、富山県美術館に気楽に行ってみようという気に向かわないのでは、と。それならば思い切ってそうした負のイメージをぶち壊す。現代美術は決して分かりにくいものではないということを知っていただくことが重要と考えました。屋外広場には、現代彫刻家を作った作品ではあるけど、「これは難解だ、分からないぞ」とは絶対に言われない作品をもってこようじゃないかということで、三沢さんを選びました。

彼は動物をモチーフにして、リアルな動物像を作るわけではない、けどもキャラクターでもない、リアルとキャラクターのちょうどその真ん中を微妙に造形に生かしている。そういう作家だったので、難解であるとか近づき難い、そういった印象をぶち壊してくれる、との考えで、作品を設置したのです。実際に置いてみて、多くの方々がそこで記念撮影をする、記念撮影して喜んで帰られる、そういう姿を目の当たりにしていると、「やっぱり現代美術って難しくないんだな」と思って帰っていらっしやるんじゃないかと思っています。塩田さん、新潟市美術館を改修される際、「くつろぎ」とか、「憩い」とか、そういう言葉がキャッチフレーズとしてあったと思うんですね。改修されてどうでしょう、皆さんどのような反応を示されているのでしょうか。

(塩田氏)

新潟の場合、開館して今年で 33 年目になるわけですがけれど、本当の意味で美術館がどのくらい市民の生活に定着しているかということ、やっぱり自信を持ってそう断言できるところまではまだ来ていないという気もします。入口はどこでもいいと思うんですね。例えば子どもさんがワークショップというか、創作体験をする場に、来ていただく、あるいは美術館でコンサートをやる。そういう場にいらっしやうってですね、そういう入口から、「じゃあついでだから展覧会も見ていこうか」とかですね、そういう形で広がって行って、少しでも印象に残っていただければいいのかなという思いはあります。

リニューアルして、例えば富山さんのように飛躍的に入場者数が増えたということは、必ずしもありません。ただやっぱり印象として、「美術館、あまりおもしろくないね」と言われていた頃から比べると、気軽に行けるんだと、美術館は敷居が高いところではなくて、むしろカフェにいらっしやる、そこでお母さん達が会話を楽しみ、子どもたちも遊ばせる。そこを入口として、美術館の存在を知っていただく。それはあくまで入口で、そこから先にいろんな、展覧会であったりワークショップであったり、あるいは学校教育との連携で生徒さんが来てくれるとかですね。そこでいろいろ鑑賞体験をしたり、それがとてもいい記憶になって、美術館の間口を広げていってくれている。

これはこつこつ地道にやっていくしかないと思いますが、そういう意味では少しずつ、結果が積み重なってきている、いいところにきているのかなという印象はもっています。

(杉野氏)

例えば「美術館と子ども」というのは重要な課題だと思います。先ほど横山さんに話をさせていただきましたが、今富山県美術館では先ほど少し報告させていただいたように、小さいお子さん、未就学児、赤ちゃんもかなりの数が来る施設になりました。で、泣き声や歓声が聞こえるわけですね。「ぎゃー」とか「きゃー」とか。それを聞いて、和めると言いますか、鑑賞の邪魔というよりも、何かそれが日常で聞こえる美術館というのは、僕は逆に素敵だなと思えるようになってしまったんですね。これがたぶん、近代美術館時代だとそんな風には思わなかったんだと思いますが、新しい場が僕のこれまでの美術館像を変えてしまったような気がします。

例えば濱田さん、先ほど長らく利用者として、美術館のこの静かな鑑賞の場をひよっとすると乱すかもしれない、そういう小さなお子さんが美術館に来るということは、どのようにお考えでしょうか。

(濱田氏)

たぶんこれまで、というか今でもそうかもしれませんが、子どもが展示室にいてそして騒いでいたりしたら、いろいろ苦情を言ってくる鑑賞者の方、入館者の方はおられるかと思うんですが、それが当たり前になるような、イメージのリニューアルというのはそれも含めますけれども、当たり前に見えるように、急には無理でしょうけれども、だんだんと思えるような美術館になっていってもらえると、嬉しいなと思います。

海外の美術館に行ってみますと、子どもたちがたくさん先生に連れられてきて、寝転んでいろいろスケッチしていたりして、それを鑑賞者も特に何ということなく避けて通っていくようなのが見られまして、ああこういうような環境が、日本にもできるといいなと、常々思っていたところでした。子どもの声が今いろいろ言われて、保育園が側にできるのが嫌だとかありますけれども、それはだんだんと変えていきたいと。ぎすぎすした世の中になってしまうと思うので。これは美術館から、ぜひぜひ子どもが美術館を走り回っているような空間になってもらえるといいのかなというふうに思っています。

(杉野氏)

展覧会を鑑賞する場ではやはりマナーが必要だと思いますけれども、例えば横山さん、美術館と子どもということで先ほどちょっとお話しいただきましたが、学ぶ要素だけではない、美術館で体験することが、やっぱり子どもたちにとって重要なものになっていくのかどうか。「学ぶ」というとお勉強のようなことにはなりますが、たぶんそれだけではないものが美術館から得られるような気がするのですが、どうでしょうか。

(横山氏)

美術体験というか、美術館でなりいろいろな所で鑑賞とか、体験したものは、やっぱり子どもたちのセンスであったりとか、生き方であったりとか、いろいろな意味で、大人になって発現される部分に結び付いてくると思います。もちろん美術館で作品を観たり、図工や美術の授業をしたからといって、全員が画家になったりとか、そういうわけではないと思うんですね。でも、たぶんここにいらっしゃる方々はもちろんそうですが、美術館でいろいろな作品を観たり、体験をすることが、自分の、例えばインテリアであったりとか、服装であったりとか、そういう一人一人の個性を形作るものに必ず繋がっているはずだと思います。

そういう意味ではやはり、図工美術教育や美術館鑑賞というのは、すごく人間形成の上で大事な分野だと思っています。もちろん知的な面で、国語や算数、社会は大事なんですけど、人としての基本的なところに美術館は深く関わっているんじゃないかと思っています。

先ほどまだ乳児というか、3歳未満の子たちがたくさん美術館に来るという話がありましたけど、そういう子たちも言葉でなかなか自分の思いを発せられなくても、外界から受けているいろんな刺激というか、それはちゃんと認知できています。今、幼児教育にも関わっているものですから。やっぱり小さいお子さんをお母さんが連れてきて、美術館の雰囲気の中でくつろぐ姿というのは、絶対その子どもたちにとって大きな影響があるんじゃないかなと思っています。

(杉野氏)

ありがとうございます。宮城県美術館では、未就学児のお子さんが美術館に来られて、何か美術を体験されている、その数は多いなと思われているのでしょうか。ちょっと少ないなということなののでしょうか。どうでしょう、そういう統計はないのかもしれませんが。

(有川館長)

展示室に入ってくるお子さんについてのデータはあまりないのですが、当館は開館当初から創作室というのがありまして、教育普及活動といいますか、要するに展覧会だけではない美術館というのを積極的に目指してきた美術館だと思っています。

そういう中で、平成27年から「どようびキッズ・プログラム」というのを始めました。これによって思った以上の反応がありまして、お子さん連れのご家族、お母さんが一緒だったりご両親が一緒だったり、いろいろなものを実際に作ったり触ったり、ということをやっております。実は「キッズ・プロジェクト」というのは、これからやりますというよりは、ゼロから始めましょうということではなくて、これまでやってきたものを生かして、それをやりやすいリニューアル、そういうことを考えております。

どのくらいの人 coming いるかというデータは今ちょっと手持ちにはないんですが、僕ら

も子どもを対象とするプログラムというのはいろいろ展開してきたんですけども、それに「キッズ・プログラム」という名前をつけることによって、さらに多くの利用者の方が、平成27年以降明らかに増えているという状態であります。

(杉野氏)

たぶん将来は少子化がどんどん進んでいくと。子どもが少なくなるから対応しなくていいというよりも、子どもたちの成長を願う上で、たぶん美術館が果たすべき役割はますます大きくなるのではないかと思います。本物を見る場、あるいは先ほどの富山県の事例ですけれども、何となく日常の中にアートがあったりデザインがあったり、そこで学ぶ、あるいは遊びながらいつの間にか学んでいる、そういう場がますます必要になってくるのではないかと思います。

もう一つ、討議すべき課題があります。「見える収蔵庫」です。僕は一応学芸員なので、収蔵庫の中を見せる、あるいは可視化するというのは、「いいね」とちょっと言えないところがあって。別に学芸員の聖域だと思っているわけじゃありませんが、どのようにすると一般の方々が見て「この収蔵庫、良かったね」と思っただけなのか、僕の中でイメージできないんです。塩田さん、長らくいろいろな美術館を回られて、いくつも収蔵庫を見られていると思いますけど、この「見える収蔵庫」というものの可能性を、学芸員として「こういったものがあるな」という事例を交えてご紹介していただけますでしょうか。

(塩田氏)

美術館のコレクションというものはどんどん増えていくわけですね。それでこちらの美術館では4,000点くらいでしたっけ、7,000?たいへんな点数ですよ。それをどう見せていくのか。もちろんコレクションのギャラリーがあって、そこで見せていくということがあると思うんですけど、そのひとつのアイデアとして、収蔵庫の中に入っただけで見ただけというのか、量的にたくさんの点数を展示して、それを表から見ただけなのか、それが収蔵も兼ねた展示であるということなのか。ちょっと具体的なイメージは分からないところもあるんですけど、一つ解決していかなくちゃいけない問題でもあると思うんですね。

私自身の経験を言いますと、私が最初に勤務した栃木県立美術館というところは、最初コレクションのギャラリーがなかったんです。80年代の初めにコレクションのギャラリーを作ったのですが、その時に「収蔵展示」ということをやってみよう。川上澄生という版画家がいてですね、その版画を収蔵しつつ、見せることができないか。取っ手を引っ張り出す方式の絵画ラックが収蔵庫に行くと、どこの美術館でもあるんですね。メッシュ状になっていて、そこに上から下まで絵画が掛かっている。それを引き出して取り出す、というような構造なんですけど、それを美術館の展示室でやってみたらどうかということ。高さ3メートルぐらいのラックを6,7枚展示室の中に設置して、そのグリッド状の枠の中



に版画を展示したことがあります。ただそうすると、版画ですから小さいもので、ちょっと上の方は見づらいとかですね、それからやっぱり作品が傷むということがあったりして、結局 10 年程度でそれを断念したことがあります。

そういうことを考えたりすると、果たして具体的にどんな方向があるのかということはあるのですが、例えば海外の美術館なんかでそういう実験的な方法を試みているところがあるということも聞いておりますし、特に現代美術は、温湿度とかそういうものを気にしないでいいものに関しては、そういうことを試みている現代美術の専門館が、海外であるようです。

いろんな問題はあるんですけど、たぶん宮城県美術館さんがやろうとしていることは、美術館にとって非常に大きな、コレクションがどんどん増える、それをどう市民の皆さんに見ていただくかということの、一つの解決法として、その可能性もひょっとしたらあるのかなと。ただ、その場合にはやっぱり、作品の環境条件とかですね、収蔵庫に例えば毎日のように入ってくる形がいいのか、当然常に光が当たっているということもありますし、その辺の問題をどう解決していくのかということが、たぶん問題になってくるのかなというふうに思っております。

(杉野氏)

塩田さん、有川さん、僕も含めて学芸員なので、日常的に収蔵庫へ入って作業をするというのは、あまり特殊なことではない。横山さん、この「見える収蔵庫」というのが実現するとすれば、どんなことを見たいのでしょうか。収蔵庫という、もちろん今まで見たことのない空間だと思うのですが、その見たことのない中で、自分だったらこういうものに興味がそそられるだろうなということがあったら、お話しいただけますでしょうか。

(横山氏)

一般に展示していないものをそこで見られるということになると思うのですが、私が一番「これなら」と思ったのは、やはり宮城県美術館のコレクションの中でもすごく充実している絵本原画なんですね。絵本原画は作家ごとにコレクションしていっしょるので、例えば今お話しいただいた、引き出し型に収蔵されているものを引き出せば、誰のこの作品の原画が見られる。例えば『ぐりとぐら』が見られるとか、そういうことができれば、子どもたちはすごく嬉しいと思います。

絵本はもともと手元で開いて見るもので、しかも細かく描いてあるものですから、絵画のように立てて展示してあると、近くに寄って見ても詳しく鑑賞するのはすごく難しいと思うんですね。なので、こういう形でたくさん作品を、なかなか展示の機会がないときにも見られるというのは、とてもありがたいなと思います。私の教えている学生たちも、保育士になろうとしているので、絵本を製作したりしているのですが、作家の原画が宮城県美術館に行けばすぐ見られるのであれば、すごくありがたいと思います。

(杉野氏)

ありがとうございます。濱田さんは以前学芸員をされていて、収蔵庫の中でも作業をされていたと思います。今度は利用者として収蔵庫が見えるということであれば、どの辺を期待されますか。

(濱田氏)

私個人も、会議の席上、このヴィジブルな収蔵庫というのを、これはどういう形になるのですかと質問をした記憶があります。どうしてその質問をしたのかというと、一般的な展示室にもってきて、展示の環境の問題が心配だったので、質問したんです。その時の説明に、地下の収蔵庫の側に展示するとお答えをいただきました。では動線もずいぶん考えなくてはいけないのかなと、その時はイメージをしておりました。

今の横山さんのお話にあったように、私も、仙台市博物館で浮世絵版画を引いて見られるようになっていきますので、絵本の原画のことも、引き出して見るということイメージしたのです。大きな額の絵ということになると、ああこれは、収蔵庫の側でないとなかなか難しいのかなというのは、イメージとしてもちました。

(杉野氏)

富山県美術館の場合は、デザイン室の椅子の積層展示や瀧口修造の小さな棚をいくつも用意したというのは、あれも一種、収蔵展示というものを前提に作ったものです。ただし、うちの場合は収蔵展示と言った時に、どっちに力点があるかということ、当然展示です。展示で見せる、けれどもそれは数多く見せるということで、収蔵展示と言いながらも展示に力点を置いていた。そういった作り、造作になっています。

宮城県美術館が「見える収蔵庫」を打ち出されていますが、今後、いろいろな意見を出し合って、練られ、そして来館者に関心をもっていただけるような設えにされるのだと思いますが、今の段階でこういうものを目指したいという何かがあるのか、最後に有川さんからお言葉をいただけますでしょうか。

(有川館長)

「ヴィジブル・ストレージ」と書いていますけれども、今検討しているのは、どうも発音しにくいので、「見える収蔵庫」とか、そういう風な何かもっとわかりやすい言葉で、最終的には考えていきたいと思っています。それをまず最初にお断りしておきます。

こういったものはですね、例は国内にもあるかもしれませんが、海外にはずいぶんあるようです。最近、ルーヴル美術館がランスというところに別館を作りました。最近インターネットで画像をたくさん見ることができるのですが、ここはホールの下、地下の一部屋から収蔵庫がみんな見えるんですね。これはちょっとやそつとじゃなくて、収蔵庫が

全部見えるくらいの大きな規模のものです。これは「見える収蔵庫」とは言わないで、「美術館の裏側」のような表現を使っていたと思います。

この「見える収蔵庫」の考え方としては、ひとつは先ほど杉野副館長が仰った通り、収蔵展示。栃木でもそういうことを行っていたそうですが、展示室の中で、収蔵しているような密度の高い状態で展示する、再現するという、収蔵展示という手法があります。これは美術だけではなくて、例えば民俗資料などはですね、失われていくものをある一定の場所に集積して収蔵しながら、それを見ることができる。こういう所はたくさんありまして、これはなかなかおもしろいものだなと思って私は見てきました。

それからもうひとつは、バックヤードツアーというのをよくやります。これは美術館だけではなくて、いろいろな工場や研究施設でも行います。これによって、企業や研究施設がどんなところなのかを知ってもらおうということですね。そういうことを美術館あるいは博物館でやろうとすると、収蔵庫というのがいつもネックなんです。入っていただくにしても、ちょっといろいろと差し障りがある。なので、この収蔵展示やバックヤードツアーといったものを、「見える収蔵庫」という形で表現できないかと考えました。

皆様が仰る通りいくつかの問題があります。一つはそこが適切な保存環境を守れるかということです。もし照明をつけていけば、常に照度に晒されているということになります。それからもう一つはセキュリティの問題ですね。収蔵庫の壁の一部がガラスになってしまうということです。それから、私どもはこういうことを考えて実現したいと思っておりますが、どのような法規制があるかということについて、詳しい調査はこれから行っていくところです。濱田さんのご質問の件で、「収蔵庫と展示室が隣接した場所でやりたい」ということを言ったのですが、設計の段階でどのようになるか、あるいは見せ方についても不確定的なところもあるのですけども、そういった時に消防法等にどういった決まりがあるのかということがこれからのところになるので、検討すべき点はいくつかあります。

ただ、ここのイラストにあるように、今想定しているのは、こういう風に、普段なかなか展示できないものを見せるという面。それから収蔵庫という所に文化財としての美術作品が蓄積されていくということ、それは美術品を蓄積するというのではなくて、たぶん人の営みが蓄積されていくということを感じ取ってほしいということです。常に消費されて消えていくものではなくて、積み重なっていくもの。それがミュージアムとしての美術館である、あるいは美術館にとっての、ミュージアムとしての仕事の一つになったということまで伝えることができれば、嬉しいなというふうに思っております。

まだ実はあまり参考にできるところがないので、いろいろ調査をした上で、お目にかけることができる日が来るように、私も一生懸命やりたいと思っております。

(杉野氏)

ちょっと時間が押しております。今日ここで先ほどから議論いたしました、「美術館における安らぎとか憩いはなんだろう」、あるいは「美術館と子どもの関係」、そして最後の「見

える収蔵庫」という点で、それほど議論は深まらなかったかもしれませんが、皆様にも考えていただきたいリニューアルの柱です。

富山県美術館では、「にぎわいのある美術館づくり」を進めてきましたが、ここでのテーマであります、憩いとか安らぎとは富山県美術館ではどうなっているのか。それは一言で言うとフリースペースをふんだんに設けたということのような気がします。憩いとか安らぎというのは、人それぞれまったく違うところで感じるもの、あるいは求めるもののような気がします。いろんな機能を持つフリースペースを用意することによって、その方々が自身の憩いあるいは安らぎを感じる。とにかくフリースペースがなければ、憩いも安らぎも感じないだろうという気がします。富山県美術館は、展示室以外は全部フリースペースで、巨大な空間があります。館で用意したもので憩いを感じられたり、ひよっとすると何にもない空間で安らぎを感じられたり。来館者の方々を見ておられますと、いろいろな楽しみ方、くつろぎ方を見つけられているという印象でございます。

最後にとりとめのない話で締めてしまいますけど、時間も押しておりますので、これでマイクを司会の方にお返しいたします。

(司会者)

ありがとうございました。時間も過ぎたところですが、今までのお話の中でご質問等ありましたら、挙手をいただきたいのですが。

(質問者)

杉野さんにお尋ねしたいんですけども、美術館は自然光のコントロールとか、温熱環境をどう保つかというのが非常に大きな課題だと思うんですけども、富山県美では美術館の中身をみんな見せるということで、東側を非常に大きなガラスのカーテンウォールにした。あのことが問題にならないのかどうか、熱の問題、光が入りすぎるところで、問題にならないのかどうか、そのあたりを教えていただけたらと思うのですが。

(杉野氏)

東面に大きなガラス面があるということで、その影響を受けるのは展示室 1 です。朝日が上がる時間帯に、直射日光が展示室の中に入ります。それを防ぐために、遮光カーテンをつけ、光に対する問題をクリアしました。実際は西日も問題があります。展示室の出口が西側に面している部屋が 2 部屋あり、遮光のカーテンを設けております。建物のハードのところでは直射日光が入らないような設えにすると、今度は展示面積を狭めてしまう。美術館としては展示空間をなるべく広くしたい、けれども遮光もしなければならないということで、当館では遮光カーテンでその問題をクリアしました。

温度の問題ですが、朝日が上がると共に東側の空間の温度が上がります。夏だと非常に暑くなります。ですから朝日が昇る前から空調を入れる処置をしています。ただ、空間の

温度は上がらないようにしていますが、日射は避けようがありません。太陽光が直接肌に当たると、日射で暑いと感じる。それをどうするか、今後の課題ですが、今のところは巨大なロールスクリーンを設けて東側のガラス面を全部閉ざすという事までは予定していません。空調の稼働を調整しながら、日射は避けられないにしても、展示室の環境に影響を及ぼさないようにすること、外気の、外の環境の影響をあまり受けないように空調のコントロールができないか、試行錯誤しているところです

(質問者)

だいたい想定したお答えだと思うんですが、もう一つ大きいのは、地球環境の問題がありまして、エネルギーをどんどん使えば、入ってくる熱も管理ができますし、いろいろできるんですけども、熱の負荷を当初の設計の段階で、もうちょっと地球環境に優しい建物にできないかという検討はなされたのでしょうか。

(杉野氏)

展示室には当然二重の壁があります。展示室の周りの環境の変化がなるべく展示室まで影響がいかないように、空調費が膨大にかかるような設備にしないことを前提にしています。収蔵庫も考え方は同じです。展示室及び収蔵庫の内部空間までには三層、四層の空気層があります。全部入れ子になっているんですね。そういう意味で、空調の負荷がどんどんかかる施設にはなっていないと思います。またオノマトペの屋上は天然芝になっており、屋上緑化です。エネルギーを莫大に消費する施設であるとは認識しておりません。

(司会者)

ありがとうございました。

宮城県美術館フォーラム「リニューアルってなんだろう？ 美術館の新しい一歩を考える」も終了のお時間となりました。コーディネーター及びパネリストの皆様、ありがとうございました。会場の皆様、コーディネーター及びパネリストの皆様に大きな拍手をお願いいたします。

これをもちまして、宮城県美術館フォーラム「リニューアルってなんだろう？ 美術館の新しい一歩を考える」を終了させていただきます。皆様本日はご来場ありがとうございました。お気をつけてお帰りください。